

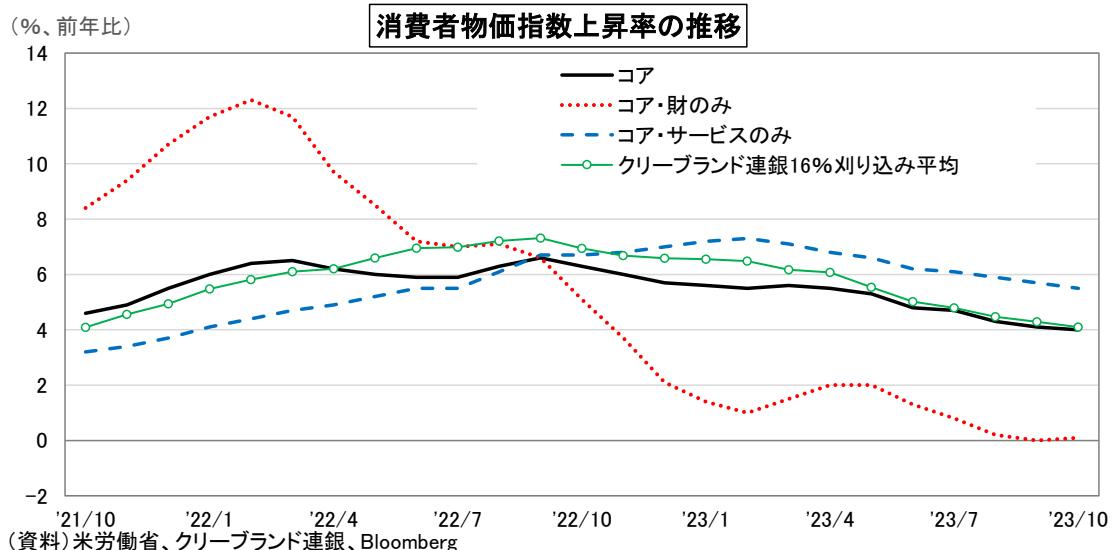
経済金融フラッシュ

リサーチ&ソリューション第1部 佐古 佳史

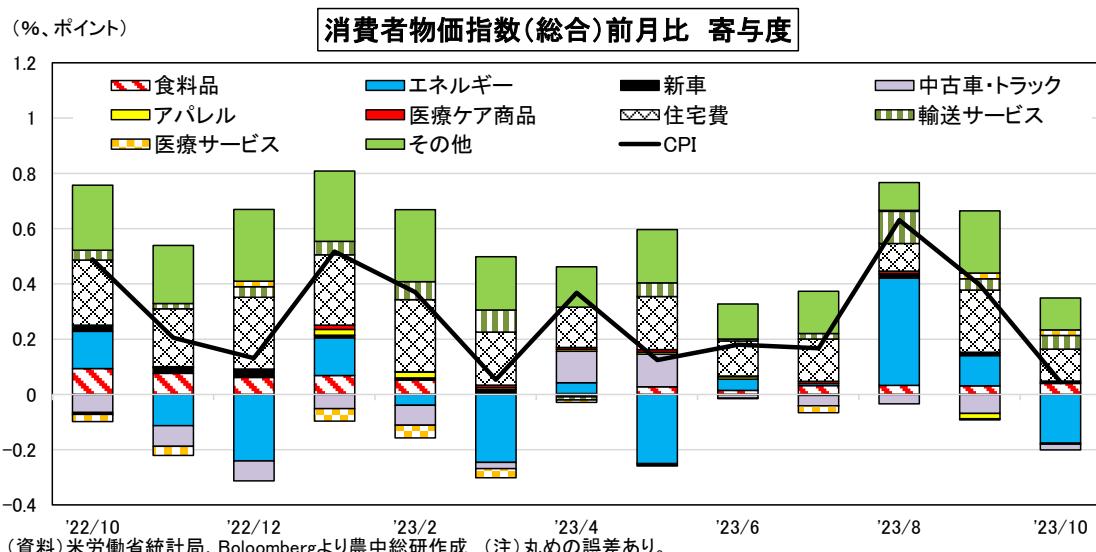
(米国)利上げ終了の手がかりとなった 10 月 CPI

10月の消費者物価指数(CPI)を確認すると、総合は前年比3.2%(前月比は0.0%)、食料とエネルギーを除くコアは同4.0%(同0.2%)となった。コアCPIは前月比0.2%と再び鈍化し、FRBの物価目標とおおむね整合的な値となった。前年比では4.0%と依然として高止まっているものの、鈍化傾向は維持されていると判断できる。

コアの内訳を前年比でみると財とサービスで状況が異なり、財は同 0%まで鈍化して安定している一方で、サービスは同 5%後半と下げ渋っている。

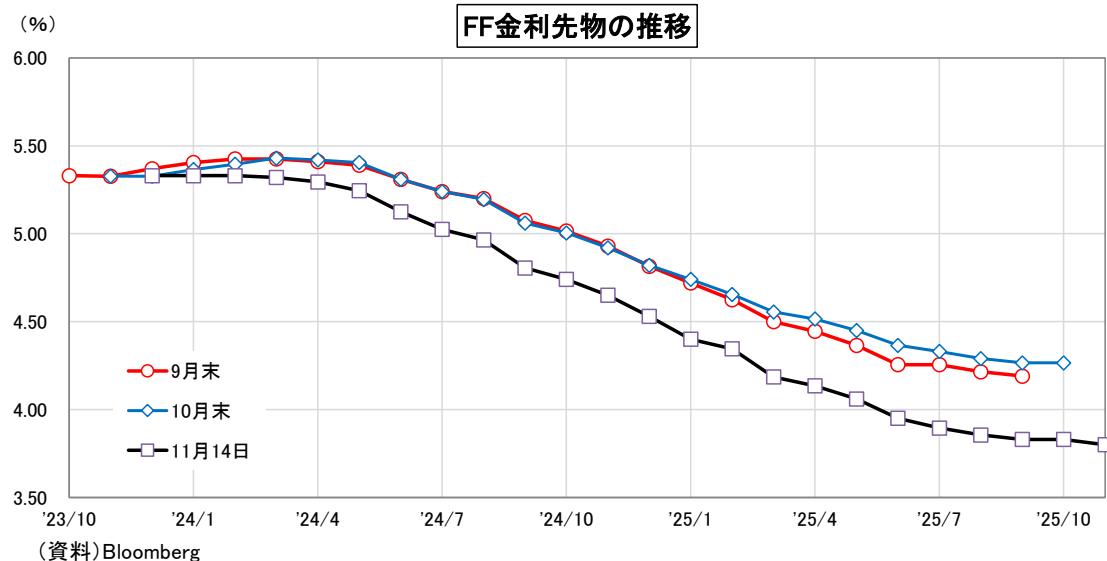


前月比で計った CPI 総合に対する寄与度をみると、10 月は輸送・サービスと住宅費のプラス寄与が大きく、エネルギーのマイナス寄与が▲0.18 ポイントと大きかった。



金融政策との関係では、10月 CPI からは追加利上げの必要性がほぼ無くなつたことが読み取れる。インフレ率は8、9月にやや上振れていたものの、10月 CPI からは、(PCE デフレーターで計った)2%物価目標と整合的なペースへと足元のインフレ率が再び鈍化したことがうかがえる。このため、次回の12月 FOMC(12月12~13日)では利上げが見送られる可能性が非常に高そうだ。

また、FOMC 後に公表される経済見通しなどから、24年以降の利下げペースを考えることとなるだろう。ちなみに、11月14日のFF金利先物では、24年半ばからの利下げが織り込まれており、24年内の利下げ幅は1ポイント程度と予想されているようだ。



需給がひっ迫している労働市場を反映して、コア・サービスのインフレ率が高止まっているため、インフレ率が2%物価目標まで順調に鈍化し続けるかについては判断が分かれそうだ。この点について、FRBがどのように考えて見通しに反映させるかも注目材料と思われる。